

審査の結果の要旨

氏名 川崎 舞子

近年、千人以上の事業所において心の問題で1ヶ月以上の休職や退職をした者が存在する割合は90%を超える事態となっており、休職者の職場復帰支援の必要性和重要性が増している。そこで本論文は、現在実施されている職場復帰のためのリワークプログラムの課題を検討し、職場復帰経験者の体験プロセスの分析を通して当事者のニーズに即した復帰支援プログラムを開発し、その効果を検討することを目的とした。論文は、先行研究を概観し、現行プログラムの課題を明らかにする第1部、うつ病による休業者の心理プロセスを質的に研究する第2部、個人面接とグループワークを組み合わせた支援プログラムを開発し、実践効果を検討する第3部、結果を総合的に考察する第4部から構成される。

第1部1章では産業領域のメンタルケアと休業の実態を明らかにし、2章では復職への困難感や不安といった心理面への支援が不足している現行のリワークプログラムの課題を明らかにし、3章で心理支援を含むプログラム開発という本研究の目的と構成を示した。

第2部4章では、休業を経験した勤労者12名の職場復帰プロセスを質的に分析し、「症状改善に向けた関わり」「今後に向けた意思決定」「職場復帰に向けた関わり」の3段階モデルを生成し、各段階で心理支援のニーズや目的が異なることを明らかにした。5章ではリワークプログラム参加者15名の復職準備状況を質的に分析し、職場復帰行動をとるきっかけが時間的・経済的制約となっていることを明らかにした。さらに復帰準備を適切に進めるためには、休業者が抱える迷い・不安・恐れを受け止めて現実的困難を認識した上で復職に向けての行動を促進する、寄り添う個別的な支援が必要であることを示した。6章ではリワークプログラム利用者13名の支援スタッフとの個別的関わりを質的に分析し、「厳しさを乗り越えるプロセス」と「社会的営みを取り戻すプロセス」を促進する関わりが有効な対応であることを明らかにした。

第3部では、第2部で得られた知見に基づき、従来のリワークプログラムの限界を超えることを目的として個別面接とグループワークを組み合わせたコンバインド・リワークプログラムを開発し、実施と評価を行った。7章では、個別面接によって職場復帰のイメージをアセスメントし、復帰に向けてのプロセスに関する情報提供をする第1期、週1回全12回のグループワークを個別面接と並行して実施する第2期、グループワーク終了後に個別面接によって生活リズム維持と復帰後のフォローアップを行う第3期から構成されるプログラムの内容と実施手続きを示した。8章では、職場復帰を考えている休業者20名に対してコンバインド・リワークプログラムを実施し、職場復帰15名、退職2名、休職継続3名(うち中断1名)との結果を得た。グループワーク実施前後のうつ状態の測定尺度(BDI-II)得点の変化に関しては、回答を得た15名において有意な低下がみられた。

第4部9章では研究の意義を明らかにし、10章で今後の課題を示した。本論文は、休業者の体験の質的研究に基づき、復帰準備の個別的な心理支援に加えて、個人支援の場と居場所となるグループの場を行き来できるコンバインド・プログラムを開発した点、統制群を設けた効果研究ではないという限界はあるものの、プログラムの実施と評価を行い、有効性を検討した点で特に意義が認められる。よって本論文は、博士(教育学)の学位を授与するに相応しいものと判断された。